被災地にできること

学校法人尚学学園沖縄尚学高等学校附属中学校３年　　土屋　日和

私の名前は「日和」です。私は、宮城県石巻市に生まれました。そこは東日本大震災で大きな被害を受けた場所です。石巻市には人々のシンボルである日和山があり、神社もあります。そこから見える景色は太平洋が一望に見られとても美しいです。その地にちなんで父母が日和と名前をつけてくれました。その麓にある門脇町・南浜町という場所は多数の民家をはじめ、大きな工場や市立病院などもありましたが、震災で壊滅状態に陥り、多数の犠牲者を出しました。震災が起こった時、日和山に登った多くの人々の命が助かったといいます。この夏、私はその地に行き、震災の跡地を見てきました。山のすぐ下の門脇小学校は、津波の後に火事が起き、今は震災遺構として残されています。そこを見た時、震災の恐ろしさを肌で感じました。震災から十一年経った今、日和山から見る景色は復興が進み、公園や道路、橋が出来ていて、震災前とは変わった景色が広がっていました。とてもすばらしい景色でした。ここまで復興するには、自治体や政府からの支援、国民の税金が使われ、更にボランティアの人々の活躍、そして建設業に関わった多くの人たちの努力があってのことだと思います。

これからますます日本は地震による津波だけでなく、気候変動などの影響で大雨による洪水や橋の倒壊、土砂災害、家屋の損壊など多くの災害が発生して来ると思います。そのため復興に多くの資金を必要とするはずです。

私たちは、災害と税金の関係性を考えていかなければならないと思いました。その具体例の一つとして「復興特別所得税」というのが挙げられます。この税金は東日本大震災の復興の施策に必要な財源を確保するために作られたもので、東日本大震災の後、平成二十五年から令和十九年まで二十五年間払い続けるそうです。実際にこの税金は所得税が課税されている国民が払っています。災害に遭遇しない地域にいる人は税金を払いたくないと思うかもしれませんが、日本という一つの国の助け合い精神からみればたとえ災害に遭わなくても「復興特別所得税」を払うという協力が特に大切であると思います。

私が今まで学校での避難訓練をはじめ、防災グッズを揃えてみたり、実際に被災地を訪れ話を聞いたりすることで自然災害の学習をしてきました。ですが今回、税金と東日本大震災の関わりを調べることで災害復興には多くのお金が必要と知り、いつもとは違う観点から災害の恐ろしさを感じることが出来ました。

自分が大人になって税金を払うことになったら、「復興特別所得税」が、東日本大震災の被害を受けた場所の復興に協力出来ると誇りに思って払っていきたいです。

被災地が少しでも早く復興できるよう願うと共に、納税という形でも被災地を支援していきたいです。